

研究ノート

近現代インドの政治・社会変容とスイク・アイデンティティ¹⁾

井坂 理穂*

Sikh Identity and Social and Political Changes in Modern India

ISAKA Riho

Abstract

This paper examines the way in which the question of Sikh identity was discussed in social and political contexts of colonial and post-colonial India. Although the symbols commonly associated with Sikhism and the codes of conduct and doctrines that are now widely shared among the Sikhs are partly based on ideas that were formed in the pre-colonial period, they were largely reconstructed during the colonial period through various socio-religious and political movements in which attempts were made to define who is a 'Sikh'. This essay describes how Sikh leaders from the mid-nineteenth century onwards tried to unite the community and differentiate this community from others. It further seeks to demonstrate how these movements in turn gave rise to ideas that associated this community with a specific language and a region, namely, Panjabi and Panjab. Being a non-Panjabi specialist, I analyse the case of Sikh identity largely based on secondary sources, with the aim of considering how we could further develop our studies on the reconstruction of different communities and regions in modern India.

要旨

本稿は「スイクとは誰か」をめぐる議論の変遷を、植民地期から独立後にかけての政治・社会的背景とあわせて概観したものである。現在、スイクのシンボルとして広く認識されている諸要素や、スイク・コミュニティの間で大きな影響力をもつ規範・教義は、植民地期以前のスイクの歴史のなかで形成されたものを引き継ぐと同時に、植民地期に展開した「スイク」を明確に規定しようとする動きによって再構築された側面をもつ。本稿では、相対的に多くの蓄積をもつスイク・アイデンティティについての先行研究をまとめながら、19世紀半ば以降の宗教・社会改革運動や政治運動のなかで、スイクの統一化や他コミュニティからの差異化を求める動きが台頭した過程や、こうした動きがスイクを特定の言語・地域と結びつける言説を促した過程を概観した。

* 東京大学大学院総合文化研究科准教授

・ 2006, "Gujarati Elites and the Construction of a Regional Identity in the Late Nineteenth Century," in Crispin Bates (ed.), *Beyond Representation: Colonial and Postcolonial Constructions of Indian Identity* (New Delhi: Oxford University Press, 2006), pp. 151-176.
・ 2002, "Language and Dominance: The Debates over the Gujarati Language in the Late Nineteenth Century," *South Asia*, 25-1, pp. 1-19.

そのうえで、他地域の事例も念頭におきながら、近現代インドにおけるコミュニティの再構築過程に関する研究の分野で、今後どのような方向性がありうるのかを検討している。

1. はじめに

本稿は、近現代インドにおいて、「シイク教」とは何であるのか、「シイク（シイク教徒）」とは誰であるのかをめぐり、いかなる議論が展開されてきたのかを、政治・社会的背景とあわせて検討することを目的としている。インドに関する概説書のなかで、シイクはしばしばターバンを巻いた男性たちの姿と結びつけて紹介され、ヒンドゥー教徒とは異なる集団として、それゆえに「多宗教の国インド」を表す存在として語られている。こうしたインド社会の捉え方は、センサス（国勢調査）をはじめとする政府の公文書で、植民地期から現在にいたるまで繰り返し提示されてきたものである。しかし実際には、センサスの作成に携わった植民地官僚たち自身も痛感していたように、在地社会の信仰のあり方や人々の意識は、宗教コミュニティの区分には必ずしも対応しておらず、そのことは調査の際の人々の回答のしかたにも表れていた。こうした宗教コミュニティの公文書上の区分と実態との差異は、各宗教コミュニティをどのように定義するのか、誰がそこに属するのかをめぐって、植民地期以降、政治・行政・学問の分野における活発な議論を生み出すことになった。そこには、インド社会の多様で相互に混じりあっている信仰形態に、「宗教」という言葉、概念をあてはめて説明することが適当なのか、という根本的な問いも絡んでいる。

本稿ではこれらの議論のなかから、「シイクとは誰か」という問いをめぐる議論や、それらの議論にもとづいて展開された政治・社会運動を、植民地期から独立直後の時期に焦点をあてて論じる。現在、シイクのシンボルとして広く認識されている諸要素や、シイク・コミュニティの間で大きな影響力をもつ規範・教義は、植民地期以前のシイクの歴史のなかで形成されたものを引き継いでいると同時に、植民地期に展開された「シイク」を明確に規定しようとする動きによって再構築され、現在のかたちへとつながった側面をもつ。本論は、どのような人々が、いかなる背景のもとに、どのようなかたちで「シイク」のあり方を規定しようと試みたのか、また、これらの試みがシイクの間にどのように影響力を拡大し、そのことがシイクとシイク以外の人々との関係にいかなる変化をもたらしたのかを、先行研究をもとに概観する。近年のインド近代史研究では、植民地期に支配権力と在地社会との相互作用のなかで、宗教、カースト、言語、地域など、様々な要素にもとづくコミュニティが再構築された過程が、それらの相互間の関係も含め、数々の事例研究を通じて明らかにされている。本稿で取り上げるシイク・アイデンティティの事例も、こうした植民地期における社会変容の全体像を念頭におきつつ、その一部としてとらえる必要があるだろう。

本稿はもともと、既存の研究成果や研究動向を紹介することを目的として書かれたものであり、また、筆者自身がインドの他地域（グジャラート）を主な研究対象としていることもあり、シイク

研究そのものに対して新たな知見を加える性格のものではない。ここでの主な目的は、相対的に多くの蓄積をもつスィク・アイデンティティについての先行研究を概観しながら、近現代インドにおけるコミュニティの再構築過程に関する研究の分野で、今後どのような課題や方向性が考えうるのかを探ることにある。ここで得られた手がかりをもとに、グジャラートも含め、インドの他地域における宗教、カースト、言語、地域概念の変遷過程について再検討する作業自体は、別稿において試みたいと考えている。

2. 植民地期の宗教改革運動—スィク・アイデンティティとカールサー

ナーナク（1469–1539）を創始者とし、唯一神への信仰を説くスィク教は、いくつかの宗派が存在するとはいえ²⁾、その歴史認識や教典、慣習には一定の統一性が存在するとの印象をもたれがちである。しかし実際には、スィク研究で重要な業績を残した W・H・マクレオドの講演集『スィクとは誰か？』[McLeod 1989a] に明示されているように、スィクを定義することには様々な困難が伴う。「スィク」という言葉はサンスクリット語起源であり、「弟子」を意味している。このことからもうかがえるように、スィク教においては「グル（師）」が大きな重要性を占める。「グル」の言葉は、唯一神（サト・グル、至高のグル）のほか、ナーナクからゴービンド・スィングまでの 10 人のスィク教指導者³⁾、さらには教典アーディ・グラント（グル・グラント・サーヒブ）を指すのに用いられる [Bowker 1997: 899]。ナーナクは、同時代の北インドにおけるヒンドゥー教のバクティ（神への信愛を表す信仰形態）やイスラームのスーフィズムの影響を受けたともいわれており、のちに第 5 代目グルのアルジャンのもとで編纂されたアーディ・グラントには、これらの思想を説いたヒンドゥー、ムスリムの「聖者」たちの歌も含まれている⁴⁾。ナーナクの教えの根幹は、真なる神への信仰であり、やがて彼の教えに従う者たちからなる共同体が形成されていった。第 2 代目以降、スィク勢力はさらに拡大し、パンジャブ地方においてムガル帝国としばしば対立する一大勢力となってゆく。

本論のテーマとの関係で重要であるのは、第 10 代目ゴービンド（1666–1708）が弟子たちの間で、「カールサー」と呼ばれる組織を形成したことである。「カールサー」とは「純粋な」を意味するアラビア語に由来する言葉である。伝承によれば、1699 年のヴァイシャーキーの日に⁵⁾、ゴービンドは弟子たちを招集し、グルに対する忠誠の証として自らの頭を捧げる者がいるかどうかを尋ね、名乗り出た者をテントの中に導いたのちに、血のついた剣とともに戻ってきた。さらに 4 人の志願者について同様の行為がなされた後、ゴービンドはすでに死んでいたかと思われていた 5 人とともに現れた。彼が 5 人を生き返らせたとも、剣についた血は山羊のものであったともいわれている⁶⁾。この 5 人は「カールサー」の最初の入信者となり、ゴービンド自身も彼らの手で入信の儀式を受けた。入信者たちは、剃らない毛髪、櫛、鉄製の腕輪、剣、短いズボンという 5 つのシンボル（いずれも K の頭文字で始まることから、5 つの K とも呼ばれる）を身につけることを命じられ、「スィ

ング（獅子、の意）」の名を与えられた⁷⁾。以上がカールサー誕生の物語だが、W・H・マクレオド、H・オペロイその他の研究者たちが示すように、ゴービンドによってこのとき定められたとされている5つのKや禁煙などのカールサーの生き方や規範が、彼の時代に実際にどこまで規定されていたのかは、必ずしも明らかではない。また、少なくとも植民地期以前のパンジャブでは、これらの規範を共有していないスィクも数多く存在していたと思われる [McLeod 1989a: 41; McLeod 2006: 78; Oberoi 1994: 24; コウル, サンビー 1986: 216]。これらの先行研究をみる限りでは、近現代にスィクの間で主流となっていく歴史観とは異なり、この時代のスィクの慣習は、スィク以外のコミュニティの場合と同様にきわめて多様であり、カールサーの影響力はいまだに限定的であったと考えるのが妥当だろう。ただしその一方で、その影響が限られていたにせよ、ゴービンドの時代に、カールサー形成を通じてスィクやその信仰形態を再規定する試みがなされたことは⁸⁾、19世紀半ば以降に「スィクとは誰か」を明確に定義しようとする動きが活発化した際に、その大きな拠り所となっていくのである。なお、ここで取り上げたマクレオドやオペロイらの研究は、植民地期以前のスィク・アイデンティティにおける多様性・流動性や宗教コミュニティ間の境界の曖昧さを強調したり、それまでスィクの間で支配的であった歴史観（グルに関する聖人伝も含め）を再検討したことで、一部のスィクやスィク研究者からの反発を呼び、激しい論争を巻き起こすことになった⁹⁾。

18世紀末から19世紀初めにかけての時代には、ランジート・スィング（1780-1839）のもとでパンジャブ各地の政治勢力が統合され、スィク王国が形成される。しかしその歴史は長くは続かず、1849年にはイギリス東インド会社に併合されることとなる。イギリスは、この地が軍事的な要所であったことから、政治的・経済的安定を維持することに留意し、スィクを自らの軍隊に取り込むことで彼らの雇用を安定させることに努め、灌漑地域を拡大して農業生産・雇用の増加をはかる [藤井 2003: 118; 長谷 1990: 167]。軍隊へのスィクの採用は、スィク王国をはじめ、スィクの歴史において軍事的な伝統がみられていたことや、これを根拠としてイギリス人官僚の間でスィクを「軍事に適した民族（martial race）」とみなす見解が存在したこと、1857年のインド大反乱においてスィク勢力がイギリス側についたことなどにより、さらに促され、軍全体におけるスィクの割合を押し上げていった [藤井 2003: 118-123; Ballantyne 2006: 64-65; Ibbetson 1883: 139-140]。なかでもスィクの農民カーストであるジャート（ジャット）が積極的に採用されている点が目を引く [McLeod 2007: 125-126]。ジャートはスィクの代表的なカーストであり、1881年のセンサスではスィク人口の6割以上を占めていた [Singh 1998: 3261; Ibbetson 1883: 139]。

ここで注目したいのは、イギリスが軍に採用するスィクとして、カールサーに入信しているスィクを想定していたことである [Ballantyne 2006: 65-66; Fox 1985: 142]。そこにはイギリス人官僚の宗教観や統治理念が反映されている。近年のT・バランタインの研究に示されているように、彼らのなかには、スィク教をプロテスタンティズムと重ねあわせながら、スィクを宗教改革者として好意的にとらえたり、ヒンドゥーやムスリムとは明確に区別しうる存在として位置づける者たちがいた

[Ballantyne 2006: 38–50]。シクに対するイギリスの見解は、1881 年以降、10 年ごとに行われたセンサスにも現れている¹⁰⁾。ここでもシクとして認められたのは、入信の儀式を行い、5 つの K を保持し、喫煙を行わないシクのみであり、これらの条件を満たさない者は、多くの場合、ヒンドゥーに分類された [Oberoi 1994: 210–212; Ibbetson 1883: 136]。この定義は 1891 年のセンサスにおいても同様であり、ヒンドゥーのカテゴリーのなかには、シクのグルたちの名前を付した「宗派」が数多く含まれている [Oberoi 1994: 212; MacLagan 1892: 92]。こうした分類に対しては、植民地官僚の間からも疑問の声があがり、1901 年にはカールサーであるか否かではなく、シクと答えた者をすべてシクとして記録するという方向が提言され、1911 年以降はこの提言が採用されている [Rose 1902: 124; Kaul 1912: 153–154; Middleton and Jacob 1923: 183]。しかしながら、カールサーの伝統・規範をもとにシクを定義しようとするそれまでの植民地政府の姿勢は、カールサー・シクのみを軍隊に採用するという方針とあいまって、後述するようにすでにシク・エリートたちに重要な影響を与えはじめていた¹¹⁾。

植民地政府の政策と並んで、パンジャブ地方におけるキリスト教宣教師たちの教育・出版活動、改宗活動も、シク改革運動の重要な背景となっている。インドの在地の信仰や慣習に対する宣教師たちの批判や、在地社会のなかからキリスト教へ改宗する者が現れはじめたことは、シクのみならず、ヒンドゥー、ムスリムのエリートの間にも危機意識をもって受けとめられた [Jones 1989: 95–121]。こうした状況を受けて、19 世紀後半のパンジャブ地方では、各宗教コミュニティのなかから、自分たちの「本来」の宗教のあり方に回帰することを訴える復古主義的な改革運動が次々に登場している。ヒンドゥーの間では、アーリヤ・サマージがとりわけ顕著に影響力を拡大し、シクの改革運動と相互に影響を及ぼしあうようになる¹²⁾。これらの改革運動の指導者たちは、キリスト教宣教師やイギリス人官僚たちからの批判を意識しながら、「自分たち」の伝統・慣習の「本来」のかたちはどのようなものであるのかを論じ、コミュニティ内部に対して、それらを遵守することや、「本来」のものではない「悪しき」慣習を廃することを訴えかけている。彼らにとって、こうした宗教・社会改革は、コミュニティ内の団結を強め、社会的地位の向上を促すものでもあった。自分たちの主張を広めるために、彼らは結社を設立したり、当時広まりつつあった印刷・出版技術を積極的に利用している。また、植民地政府に対してもコミュニティの「代弁者」として、コミュニティの地位や権益保護を訴えていく。

こうした流れのなかで始まったシクの宗教・社会改革運動は、ブラフモ・サマージなどの同時代のその他の宗教改革運動から影響を受けながら、当初は在来の支配者層や伝統的知識人層を中心として組織された。彼らによって、1873 年にアムリトサルに設立されたシュリー・グル・シング・サバー (Sri Guru Singh Sabha) は、シクの慣習を記録し、伝統を伝えることや、植民地政府に彼らの主張を示すことを目的としており、その支援のもとでシク教に関する出版物が次々に刊行されている [Oberoi 1994: 244–252]。このサバーの活動では、シクがヒンドゥーの神々やイスラーム

の聖者を信仰・崇拝している状況や、ヒンドゥーと多くの慣習を共有している状況について、とりわけ批判的な姿勢はみられない [Oberoi 1994: 253–257]。ところが、これに続いて 1879 年にラーホールに設立されたスィング・サバーでは、植民地統治下で西洋式の教育を受けたエリートたちが主導権を握り、「真の」スィク教やスィクの「正統的」慣習のあり方を説き、民衆の間で実践されている信仰形態を批判するなど、スィク教と他宗教との境界を明確化させる傾向が現れはじめる [Oberoi 1994: 289–295]。

その後、スィング・サバーは各地に設立され、1880 年から 1900 年の間に 115 ものサバーが設立されている [Oberoi 1994: 295]。これらのスィング・サバーによって、スィクの子弟のためのカレッジ（カールサー・カレッジ）が 1892 年にアムリトサルに設立され、各地のスィング・サバーを統括するための組織もつくられていく [Oberoi 1994: 302; Grewal 1998: 145, 148; Kaul 1912: 157]。このように改革運動が広がりを見せるなかで、その主流となっていたのは、カールサーの伝統や規範を強調しながら、スィク内部の統一化や他コミュニティからの差異化を目指す主張であった。急進的な改革主義者たちは、同時代のスィク・コミュニティの「墮落した」状態を改め、「タト・カールサー」と呼ばれる「純粋な」スィクへの回帰を訴えていく。そこでは、他宗教の神や聖人、偶像やシンボルを崇拝したり、「本来の」スィクのものではない慣習や儀礼を行うことが強く非難された [Oberoi 1994: 305–377]。たとえばホーリーの祭りはヒンドゥーのものであるとされ、これに参加することは背教者になることを意味すると非難され¹³⁾、これらに代わり、スィク特有の儀礼や社会的空間をつくることが目指されている [Sethi 1998: 194]。1911 年のセンサスでは、スィング・サバーが「ゲル・ゴービンド・スィングの教義をナーナクの信者すべてに対して強要している」ことが指摘されている。また同センサスには、こうした動きが、カールサー・スィクとそれ以外のスィク¹⁴⁾ の間の関係にも影響を及ぼしていることも示されており、たとえば、両者の間にはかつては通婚関係がみられたにもかかわらず、今や前者の父親は、後者が「(カールサーへの) 入信」をしないかぎり、娘を嫁がせようとしないと指摘もなされている [Kaul 1912: 153]¹⁵⁾。

ここで留意したいのは、K・W・ジョーンズらの研究が明らかにしたように、このようにスィク・アイデンティティが再構築される過程が、しばしば他の宗教コミュニティで展開されていた改革運動によっても促されていた点である。たとえばアーリヤ・サマージは、一時期はキリスト教への対抗意識からスィング・サバーと良好な関係にあったのだが、1888 年にはスィク教やナーナクに対する批判を公に表明し、これを機にそれまでサマージに加わっていたスィクのメンバー 3 名が組織を離脱し、ラーホール・スィング・サバーに加わっている [Jones 1973: 461–462]。1898 年には、スィク男性の遺産相続に関して、ヒンドゥーの相続法を適用しうるか否かを争う裁判で、スィクはヒンドゥーであるか否かが焦点となる。裁判所がスィクをヒンドゥーとみなす決定を下すと、スィクの間では大きな論争が巻き起こる [Jones 1973: 467]。さらに 1900 年には、スィクの「不可触民」カーストに属する 200 名が、アーリヤ・サマージによる「浄めの儀式」を受けるといふ事件が起こる。

すなわち、このときサマージは彼らに聖紐を与え、その髭や髪の毛を剃り、ヒンドゥーへと改宗させたのである [Jones 1973: 469-471; 1989: 113-114]。この事件の背景には、シークの改革運動が上位カースト出身の指導者たちの主導下であり、主張のうえではシーク内部でのカースト差別をヒンドゥーからの悪しき影響として非難しながらも、現実の「不可触民」差別の解消には消極的な態度を示していたことがあった。アーリヤ・サマージはこうした状況に対するシーク不可触民の不満をもとに、彼らに対する改宗運動を進め、シーク・エリートから大きな反発を呼ぶこととなる¹⁶⁾。このような一連の流れのなかで、ヒンドゥー、シーク双方のエリートの間では、宗教や宗教コミュニティ間の差異・境界を強調する動きがさらに促されていった¹⁷⁾。同じような動きはシーク、ムスリム間の関係においてもみられており、19世紀終わりごろからムスリムがシークを、あるいはシークがムスリムを、それぞれ自分たちの宗教に改宗させる運動がみられている [Uprety 1980: 15-16]。

ただし、ここまで述べてような植民地政府の政策やスィング・サバーの活動が及ぼす影響の大きさは、都市と農村、各々の地域やカースト、そのときどきの文脈によって、様々に異なっていた点を強調する必要がある。たとえば軍隊に入るためにカールサーのシンボルを身に付けていた人々も、いったん軍隊を去ったのちにはこれらを身につけなくなるなど [Ballantyne 2006: 67]、カールサーの規範や伝統が、公的な記録のうえで「カールサー・シーク」に含まれていた人々の間で、均質に共有されていたわけではなかったことは明らかである¹⁸⁾。このように公的な記録に現れない部分をいかにして探るのかは、他のコミュニティに関する研究にも共通する課題だが、たとえば当時出された在地諸語の各種出版物を、小冊子や広告にいたるまでより丁寧に検討していく作業などが考えられる。近年、ベンガル語やヒンディー語をはじめ、植民地期における在地諸語の出版物、とりわけ娯楽を目的とした商業出版物に関して、興味深い研究が複数出されている¹⁹⁾。これらの研究が明らかにしているように、こうした商業出版物のなかからは、社会・宗教改革運動の指導者たちのものとは大きく異なる価値観や世界観の存在も浮かび上がっている。シーク研究に関して、パンジャープにおける在地諸語出版物、とりわけ社会・経済的により下位の階層に属する人々をも対象とした商業出版物を検討するなかで、異なる社会層に属する人々の意識や日常生活——そこには改革運動に対する風刺や距離感などが現れている可能性もある——を探る方向もあるように思われる。

これとあわせて、A・セーティーが部分的に試みているように、こうした改革運動が台頭する以前のパンジャープにおける宗教コミュニティ間の関係を、「融和」という側面ばかりではなく、コミュニティ間に存在した一定の差異化や境界のあり方にも留意しながら検討することも必要であろう [Sethi 1998; 2004]。これまでも複数の研究者から批判されてきたように、植民地期における宗教コミュニティの再構築過程に焦点をあてた研究のなかには、それ以前の在地社会をコミュニティ間の融和や、信仰・慣習の共有という観点からのみ描いているものが散見される。植民地期以前の社会において、宗教コミュニティ間にどのような区分、境界の意識が存在し、それらが日常生活のなかにどのようにみられたのか、また、そうした区分、境界のあり方が近代以降のコミュニティ間関

係にどのような影響を及ぼしているのかについては、さらなる検討の余地があるように思われる。

上記のように19世紀半ば以降、ヒンドゥー、ムスリム、シク・コミュニティのそれぞれにおいて組織された宗教改革運動は、さらに植民地政府の言語政策と絡みあいながら、この地方における宗教コミュニティと言語との関係にも重要な変化をもたらした。パンジャブ地方においては、宗教コミュニティの区分を超えてパンジャービー語が広範に話されていたのだが、植民地政府はこの地方の行政用語としてウルドゥー語を選択する。これは、この地方において、エリートの間ではペルシア語やウルドゥー語の文語伝統が広く共有されていたことや、行政官としてウルドゥー語に熟達した他地域からの人材も活用できることに加えて、イギリス人官僚の間でパンジャービー語を地域全体の言語ではなく「シクの言語」としてとらえる認識が存在したことによる [Mir 2010: 40–53]。こうした植民地政府の言語認識・政策は、在地エリートの間での宗教・社会改革運動の動向と相互に影響しあいながら、やがてヒンドゥー、ムスリム、シクをそれぞれ、デーヴァナーガリー文字表記のヒンディー語、ペルシア・アラビア文字表記のウルドゥー語、グルムキー文字表記のパンジャービー語と結びつけてとらえる傾向を促していく²⁰⁾。確かにこれらの文字については、たとえばシクの教典がグルムキー文字で表記されているなど、それぞれの宗教と一定の結びつきを有していた。しかしながら、従来はエリートの間においても、いずれの宗教コミュニティに属しているかによって、使用すべき文字や言語が特定されるとの意識は弱く、また、どの言語をどの文字で記すかについても様々な組み合わせが存在した。ヒンディー語・ウルドゥー語に関する近年の文学・歴史研究のなかでも繰り返し強調されてきたように²¹⁾、そもそも19世紀半ば以前の在地社会においては、言語間の境界についての意識が、現代の感覚とは大きく異なっていたと考えられる。しかし19世紀後半以降、こうした状況は在地エリートたちの間で次第に変化し、コミュニティと文字・言語との結びつきがより明確化されていくことになる。この流れは特定のコミュニティを特定の文字・言語、さらにはその言語が話されていると想定される「地域」と重ね合わせる言説を促し、やがて独立後の州再編問題へとつながっていく。

3. インド・ナショナリズムとシク・アイデンティティ

19世紀後半以降、シング・サバーを中心に進められてきたシクの宗教・社会改革運動は、20世紀に入ると政治運動と絡みあうことで、カールサーの伝統・規範を基盤としたシク統一化の試みをさらに推し進めていった。1910年代にはシク改革主義者たちを中心に、イギリスの保護のもとにグルドワラー（グルドゥアーラー）を支配しつづけているマハントの手から、グルドワラーを解放することを求める運動が活発化する [Grewal 1998: 157–163; 長谷 1988a: 43]。1920年には聖グルドワラー管理委員会（Shiromani Gurudwara Prabandhak Committee, 以下、SGPC）が発足し、その運動体としてアカリー・ダル（Akali Dal）が設立される。両組織は、各地のシクの志願者を組み込み、ガンディーの指導下でイギリス支配に対する非協力運動を進めていたインド国民会議

派の支援も得ながら、グルドワラー解放のための非暴力運動を率いていった²²⁾。この運動はまもなく植民地政府からの譲歩を引き出し、1922年には、投獄されていたアカーリー運動の指導者・参加者が無条件で釈放され、アムリトサル黄金寺院の鍵がSGPCに手渡される。1925年にはシーク・グルドワラー法がパンジャブ政府によって制定され、すべてのグルドワラーがマハントのもとからSGPCの管理下へと移されることとなった。これによってSGPCはシークの宗教的権威としての地位を認められ、莫大な資金を管理することになり、大きな影響力を維持するようになる[Grewal 1998: 160-162; 長谷 1988a: 44]。

このシーク・グルドワラー法のなかには、シークが誰であるかについての定義も示されており、そこには19世紀後半以降の議論の流れが明らかに反映されている。それによれば、シークとはシーク教への信仰を公言する者であり、これについて疑いがある際には以下のように宣言することが求められた。「私はシークであり、グル・グラント・サーヒブを信じ、10人のグルを信じ、他の宗教を信じないことを、厳粛に宣言いたします[McLeod 1989a: 93; Jhutti-Johal 2011: 94]²³⁾。」また、SGPCの構成員選出のための初めての選挙が1921年に行われたとき、投票権はカールサー・シークのみに限定され、選出された者は5Kを身につけることを要求された[McLeod 1989a: 92]。このようにシーク・アイデンティティのあり方が、SGPCという組織を通じて明確に示されていた点は重要である²⁴⁾。すなわち、ナショナリズムの流れにのりながら、「シークとは誰か」を規定し、それを実体化するための権威を備えた組織が形成されていったのである。さらに、独立後の1950年には、SGPCにより、シークの規範を示すものとして『シーク・ラヒト・マルヤーダー』が出版されている[McLeod 1989a: 95; 2003: 178; Ballantyne 2006: 61]。ここでもシークの定義のなかで、神や10人のグル、グル・グラント・サーヒブなどへの信仰や、他の宗教を信仰しないことなどが条件とされ、さらにカールサーの入信式への信念も条件として含まれている[McLeod 2003: 178-179]。こうしたシークの統一化を目指す動きは、必然的に、シークとヒンドゥーとの差異化をさらに強調する動きを伴っていた。1920年代のアカーリー運動以降の状況は、たとえば1931年のセンサスで、かつてヒンドゥーとして申告していた者がシークを名乗るようになったために、統計上でシーク人口が大きく増加し、ヒンドゥー人口が減少したことにも反映されている。英領・藩王国地域をあわせたパンジャブ地方全体では、ヒンドゥー人口の占める割合が1881年には44パーセントであったのが1931年には30パーセントへと大きく減少しており、一方でシーク人口の占める割合は8パーセントから14パーセントへと増加している[Khan 1933: 290-293]。

以上で論じたようなシーク内部での権力構造の変化と平行して、20世紀前半には、反英・独立運動や、これに呼応しながら進められた段階的なイギリスからインドへの権力移譲が、シーク・エリートの間には、インド社会やパンジャブ社会における彼らの立場についての意識を高めていった。独立運動や権力移譲の過程——たとえば立法府における留保議席をめぐる問題——では、しばしば宗教コミュニティ間の対立が現れ、大きな政治問題となっていた。とりわけヒンドゥー・ムスリム

というアイデンティティにもとづくコミュニティ対立は深刻さを増し、スィク・エリートの間からは、この両コミュニティの狭間にあって、彼ら自身の権益をいかに守るべきかについての関心が高まっていく²⁵⁾。さらに1940年代に入り、ムスリム連盟の主導下でイスラーム国家パキスタンを要求する運動が高まると、スィク指導者たちからは、インド独立に際してパキスタンが分離する場合には、インド・パキスタン間の緩衝国としてスィクの独立国家「カーリストーン」を創設することを主張する声や、スィクのための州を設けることを求める動きも起こる [Grewal 1998: 172-174; Menon 1957: 212, 242-243]。これらの主張が、どこまで実現を目指した提案であったのかの判断は難しいが、こうした動きは、彼らの同意なく、ヒンドゥー、ムスリムを中心として独立の形態が決められていくことへのスィク・エリートたちの警戒心を表すものであったと思われる。

第二次世界大戦後、イギリスはインド撤退の方針を固め、独立の形態をめぐる諸勢力との交渉を本格化させるが、統一インドを主張する国民会議派と、パキスタンを要求するムスリム連盟の対立は収拾せず、1947年6月には印パ分離という決定が下される。パンジャブは州自体が分割され、ムスリム人口の多い西側がパキスタン、ヒンドゥー人口の多い東側がインドへと組み入れられることとなり、州のどこに国境線を引くかは、国境画定委員会の判断に委ねられた²⁶⁾。パンジャブ州分割は、同じく州自体が分割されたベンガルの場合と同様に、独立後に大規模な暴動や人々の移動を引き起こした [Talbot and Singh 2009: 91; Vashishta 1953: 85]。ヒンドゥー、スィクはパンジャブの西から東へ、ムスリムは東から西へと押し寄せ、その過程では異なるコミュニティの人々に対する激しい攻撃や略奪、女性への暴力や彼女たちの拉致など、膨大な数の痛ましい事件が起こっている²⁷⁾。

こうした分離独立期の記憶は、パンジャブ分割により混乱に大きく巻き込まれることとなったスィクの間に深く残り、独立後の彼らの政治行動にも長く影を落とすこととなる。また、このときの人口移動の結果、インド領内のパンジャブ州においてスィク人口の割合が急増したことを受けて [長谷 1988a: 46; Vashishta 1953: 85; Anand 1969: 430]、スィクの政治指導者のなかからインドに「スィク州」を創設することを求める声があがり、1950年にはアカリー・ダルによって州創設を求める運動が開始されている [Brass 1974: 320]。この動きの背景には、1950年に施行されたインド憲法において、植民地期にスィク・コミュニティに対して「少数派」保護の名のもとに与えられていた中央・州議会の留保議席枠が廃止されるなど、それまでに彼らが有していた権利が、民主主義、セキュラリズムの理念のもとに失われていったことがあった。婚姻・相続などの家族法についても、スィクに対してはジャイナ教徒、仏教徒とともに、1950年代後半に制定されたヒンドゥー婚姻法その他のいわゆる「ヒンドゥー法」が適用されることになり、ムスリム、パールシー、クリスチャンの場合とは異なり、個別の法律が認められることはなかった。また、憲法第25条の宗教の自由に関する規定のなかでも、ヒンドゥーに関して言及した部分は、スィク、ジャイナ教徒、仏教徒を含んだものであるとの補足説明が付されている [The Constitution of India: 13]。スィクが多数を占める

「シク州」を創設する試みは、こうした独立インドの状況のなかで、シク・コミュニティの「少数派」としての意識やアイデンティティの強まり、すなわち「少数派」としての自分たちの權益を守るという観点から打ち出されていたと思われる。このように独立後のインドにおける法的レベルでの「少数派」概念の変容もまた²⁸⁾、シクやその他のコミュニティによる政治・社会運動を理解するうえで重要であるといえよう。

シク指導者からの要求は出されたものの、独立後の会議派政権の掲げるセキュラリズムの理念のもとでは、シク州創設が認められる可能性は低く、まもなくこの運動はシクという宗教コミュニティではなく、パンジャービー語話者のための州の創設を求める方向へと転化する。そこでは、旧英領インド、旧藩王国それぞれのなかのパンジャービー語地域を取り出して統合した「パンジャービー語州」を設けることが目標とされた [*Report of the States Reorganisation Commission* 1955: 140–141]。言語をもとにした州再編を求める運動は、当時、インド各地において活発化しており、独立直後は国家統合の立場からこうした「言語州」創設に消極的な態度をとっていた中央政府も、1952年以降はこれを認める方向へと政策を転換する²⁹⁾。パンジャービー語州要求運動はこの流れを受けたものであった。

ところが、この運動に対して、パンジャープ内のヒンドゥー勢力のなかからは、パンジャービー語州が実際に意味するのはシク州にほかならないとして、これに反対する声が高まる。アーリヤ・サマージなどを中心とするこれらの勢力は、この地域のヒンドゥー住民に対して、センサス作成のための調査の際には、自らの母語としてパンジャービー語ではなくヒンディー語をあげることを呼びかける [Brass 1974: 293]。印パ分離によってこの地域のムスリムの大多数がパキスタンへ移動したことから、ウルドゥー語の影響力はすでに低下しており、パンジャービー語州の創設をめぐる議論は、ヒンドゥー対シク、ヒンディー語対パンジャービー語という様相を呈することとなる。そもそもヒンディー語とパンジャービー語がきわめて類似した言語であったこともあり、アーリヤ・サマージなどの運動の影響下で、ヒンドゥー人口の間では、調査の際に母語をパンジャービー語ではなくヒンディー語と回答する者が増加した。1961年のセンサスでは、パンジャープ州のヒンドゥーの九割近くが自らをヒンディー語話者として申告している [Brass 1974: 297]。宗教アイデンティティと言語とを結びつける認識は、インドにおける「言語」にもとづく州再編過程と絡むことで、より広範な社会層に広がっていったと考えられる。

中央政府は1956年に大規模な州再編を実施した際には、パンジャービー語州の創設を見送ったが³⁰⁾、州再編を求める運動はその後も続き、最終的には1966年に、パンジャープ州は3分割される。ヒンディー語地域のうち平野部には新たにハリヤーナー州が誕生し、丘陵部は隣接するヒマチャル・プラデーシュ州に併合され、残るパンジャービー語地域がパンジャープ州となった³¹⁾。こうして再編されたパンジャープ州では、人口の約6割をシクが占めることとなり、その政治・社会には「シク州」としての性格が色濃く反映されることになった³²⁾。これ以降、シク・アイデンティ

ティのなかには、明確な地理的境界や行政・政治組織を伴った「パンジャブ州」の存在が、深く組み込まれることとなったのである。

4. 結びにかえて

本稿では以上のように、近現代における「スィクとは誰か」をめぐる議論の変遷とその政治・社会的背景を、先行研究をもとに概観した。19世紀後半以降に活発化したスィクの統一化や他コミュニティからの差異化を求める動きは、スィクを特定の言語、さらにその言語が話される「地域」へと結びつける言説を促し、州再編運動へと発展しながら、現在のスィク・アイデンティティやスィクの歴史観の土台をつくっていったと考えられる。

ここで参照したような先行研究を踏まえうえて、今後どのような研究の方向性がありうるかについては、すでに本文中でも部分的に触れたが、改めて簡単にまとめておきたい。冒頭でも述べたように、これらの点はインドの他地域におけるコミュニティの再構築過程に関する研究を進めるうえでも、何らかの手がかりを与えるものと思われる。

まず第一点目としては、カールサーの伝統・規範を基盤としたスィク統一化の動きに対して、実際にはこれに抵抗するような議論や実践もスィクの間に存在していたことに、改めて注意を促したい。たとえば、カールサーの規範を拒みつつける宗派もあれば、その場の状況にあわせて規範を遵守したり無視したりする人々もいるなど、宗教改革運動や政治運動の影響力は、その指導者たちが望むほど絶対的なものではなかった³³⁾。すなわち、いわば「建前」として広範に認識されるようになったスィク・アイデンティティのあり方とは別に、実生活においては、異なる地域や階層に属するスィクの間で、この「建前」が様々に解釈され、実践されてきたことにも留意する必要がある。そこでは信仰形態や言語の選択などにおけるジェンダー間の違いにも留意する必要があるだろう。また、この点に関連して、やや方向性は異なるが、19世紀前半以前の在地社会に関しても、日常生活における宗教コミュニティ間の関係、とりわけ差異化や境界（ときには対立も含む）のあり方について、さらに検討を重ねる必要があるだろう。これらの差異化や境界のあり方は、近現代以降の宗教改革運動に利用されたり、それらの運動によって変質した可能性をもつ一方で、これらの改革運動が目指していたかたちとは異なるコミュニティ間関係を築くのに寄与していた可能性もある。

第二点目としては、植民地期以降の「スィク・ディアスポラ」の存在が、「スィクとは誰か」をめぐる議論に重要な影響を与えていたことを指摘したい。近年、スィク・ディアスポラに関する研究が大きく進展し³⁴⁾、世界各地のスィク・コミュニティの「ホスト国」における状況やアイデンティティについての分析に加えて、彼らとパンジャブ地方との様々なつながりや相互関係を明らかにしたり、世界の異なる地域（たとえばイギリスとカナダ、など）に住むスィク・コミュニティ間のつながりを検討する試みもなされている [Ballantyne 2006: 19–23, 68–83; Singh and Tatla 2006; 佐藤 2007]。スィク・ディアスポラについては、独立後に関して注目されることが多いのだが、植民地期につい

でも、軍隊や警察として海外に渡り、大英帝国維持のための役割を担っていたシークや、労働者として東南アジア、オーストラリア、北米、東アフリカなど世界各地へと渡ったシークの人々の存在や活動は、滞在・定住先の社会はもとより、インドやその他の地域におけるシークをめぐる自己認識・他者認識に重要な影響を与えていた³⁵⁾。こうしたディアスポラ研究の視点や成果を組み込むことは、本稿で論じた植民地期から独立直後にかけてのシーク・アイデンティティの再構築過程とその意味を、さらに多角的な側面から明らかにするものと思われる。また、これに関連して、現在もインドの内外において、「シークとは誰か」についての議論や、シーク教やシーク・コミュニティをめぐる歴史・教義論争が続いており、とりわけ近年ではインターネットを通じて、地域を超えた議論や交流がさらに活発化している点にも留意したい [Jakobsh 2012: 113–117]。これらの観点は、インドの他地域、コミュニティの事例を検討するうえでも有効なものであり、グローバル・ヒストリーの流れとも呼応した現在のシーク研究の動向から学ぶところは大きいと思われる。

註

- 1) 本稿は当初、日本西洋史学会小シンポジウム「20 世紀世界にみる人の移動と暴力」(2009 年、佐藤清隆ほか)を土台に、報告やコメントを共同出版する企画がなされた際に執筆したものだが、企画自体の中止により、若干視点をかえつつ修正・加筆を行った。テーマ設定にあたっては、とりわけ [McLeod 1989a; Oberoi 1994; Ballantyne 2006] から多くの示唆を得た。本稿は、科学研究費補助金・若手研究 (B)「近現代インドにおける歴史記述の変遷」(平成 19–22 年度)の成果の一部である。
- 2) 後述するようなシークの主流とは異なる宗派として、ニランカーリー派、ナムダーリー派その他が存在する。
- 3) 第 10 代目のグルであるゴビンドは後継者を任命せず、その後はアーディ・グラントがグルとみなされることになるが、その一方で新たにグルをたてる宗派も現れた。
- 4) シーク教とこれらの思想との関係については、[McLeod 1989b: 16–31]などを参照。
- 5) ヴァイシャーカ月(4–5 月)の第 1 日目で、収穫を祝う祭りが行われる。
- 6) 詳細については、[McLeod 1989a: 28; Singh 1963: 82–83; コウル, サンビー 1986: 51–52; マン 2007: 53–60; シング 1994: 62–68]などを参照。
- 7) 当初、カールサーは男性のみを対象としたものであったが、19 世紀終わりごろからは女性をカールサーに入れる動きがみられる。カールサーに入った女性に「コウル(王女、の意)」の名をつける習慣は、20 世紀以前には必ずしも一般的ではなかったとの指摘もある [McLeod 2003: 243–245; McLeod 2006: 77]。
- 8) 18 世紀において、カールサーがどのような言説を用いて彼ら自身を他の人々から区別しようとしたのかについては、[Deol 2001]を参照。
- 9) 詳細については、[Grewal 2011]を参照。
- 10) インドにおいてセンサスは 1871 年から施行されているが、本格化したのは 1881 年からである。センサスにおける統計作成については、[三瀬 2010]を参照。
- 11) センサスのなかで、宗教コミュニティが明確に区分され、コミュニティごとに統計がとられたことは、コミュニティ間の状況を数字を用いて比較する傾向を促すことにもなった。詳細については、[Jones 1981]を参照。

- 12) アーリヤ・サマージは、1875 年、ダヤーナンド・サラスワティー（1824-83）によってボンベイで設立された。ヴェーダを重視した復古主義的な主張を掲げ、唯一神への信仰、偶像崇拜の否定、カーストの再解釈、寡婦再婚の奨励、幼児婚の廃止などの宗教・社会改革を推進した。19 世紀後半のパンジャープにおける様々な改革運動については、[Jones 1989; Linden 2008] を参照。
- 13) *Holi Hai*, Bhag 1 (Amritsar, 1902), p.32, in [Sethi 1998: 64].
- 14) 彼らはしばしば、長髪（ケース）をもつ「ケースダリー」と長髪をもたない「サハジダリー」の区分で語られている。「サハジダリー」の「サハジ」は、「徐々に」という意味で解釈されることもあるが、ナーナクがこの言葉を瞑想における精神的な恍惚状態を表すのに用いたことに由来するとの説もある [McLeod 2003: 26]。
- 15) しかし同センサスによれば、この時点でも両者の通婚関係がすべてなくなったわけではなく、また、同じ家のなかにケースダリー、サハジダリーの両者が存在している事例も依然として数多く存在していた [Kaul 1912: 154-155]。
- 16) 1905 年には、今度はシク改革主義者たちが、アムリトサルにあるシクの拠点である黄金寺院から、「ヒンドゥー」と結びつけてとらえられていた諸要素を排除することを試み、ここでも論争が引き起こされる。このときシクの寺院管理者は、それまで寺院内の池で沐浴をし、ヒンドゥーの神々に祈りを捧げていた人々に対して、この習慣を廃することを告げ、それとともに、それまで寺院内で儀礼を執り行っていたバラモンの権利をも否定した [Jones 1973: 473]。
- 17) 1909 年に、シク改革主義者たちの働きかけによって、シクの婚姻儀礼を規定したアーナンド婚姻法が制定されたことも、他の宗教コミュニティからの差異化をはかる試みの一環としてとらえることができる。
- 18) 統計上では、カールサー・シクはシクの大部分を占めるようになり、1921 年のセンサスではシク人口の 9 割以上がケースダリー、すなわちカールサー・シクに分類されている。このときの統計を 1911 年のものと比較すると、ケースダリーの人口が 19 パーセント増加したのに対して、サハジダリーの人口は 49 パーセントも減少しており、宗教改革運動などの影響により、カールサー・シクへの統一化の動きが進んだことは明らかである [Middleton and Jacob 1923: 185]。
- 19) たとえば [Ghosh 2006; Orsini 2009] などを参照。
- 20) これに関連して、ブラカーシュ・タンドン（1911-2004）が回想録のなかで、アーリヤ・サマージの影響で、彼の母親の世代のヒンドゥー女性はパンジャービー語を話しながらも、書くための言語としてはデーヴァナーガリー文字によるヒンディー語を習得していた点に触れているのは興味深い [Tandon 1961: 67]。宗教コミュニティと言語との関係に関しては、ジェンダー間の相違にも着目する必要がある。
- 21) たとえば、[King 1994; Orsini 2010] などを参照。
- 22) この反政府運動は、「アカリー運動」と呼ばれているが、19 世紀の歴史と結びつけるかたちで、「第三次シク戦争」の名称で呼ばれることもある。詳細については、[Singh 2008] を参照。
- 23) この定義には様々な問題があり、たとえば、これをそのまま適用すれば、10 代目のグルより前に生きていた者はすべてシクではないことになり、またすでに他界している者については、自身でこうした宣言ができないために、シクであるか否かを判断できないことになる。1930 年にシク・グルドワラー法が改訂された際には、すでに他界している者については、シク教への信仰を公言していた者や、存命中にシクとして知られていた者をシクとして認める旨が明記されている [Jhutti-Johal 2011: 94]。
- 24) SGPC や SGPC の出版物については、<http://sgpc.net/index.html> を参照。
- 25) 1931 年のセンサスによれば、藩王国を含むインド帝国の全人口のうちヒンドゥー、ムスリム、シクの占める割合は、それぞれ 68 パーセント、22 パーセント、1 パーセントであり、英領パンジャープ州ではそれぞれ 27 パーセント、57 パーセント、13 パーセント、パンジャープの藩王国地域ではそれぞれ 46 パー

- セント、33 パーセント、21 パーセントであった [Hutton 1933: 514-517; Khan 1933: 291]。
- 26) 実際に国境線が発表されたのは、独立の2日後の8月17日になってからのことであった。
- 27) 分離独立に関しては、オーラル・ヒストリーの手法なども取り入れながら、分離前後の混乱に巻き込まれた人々の経験に焦点をあてた研究も出されており、地域、階級、ジェンダー、カースト、コミュニティによる経験の違いが明らかになりつつある。詳細については、[Butalia 1998; Talbot and Singh 2009]などを参照。
- 28) 詳細については、[Tejani 2007; Bajpai 2011]を参照。
- 29) 中央政府の言語州政策については、[井坂 2011]を参照。
- 30) ただし、このときそれまでパンジャブ州であった領域に、周辺のパンジャビー語地域からなる旧藩王国領（独立後に PEPSU、すなわち、パーティーアラール・東パンジャブ藩王国連合として統合された地域）が併合されている。また中央政府は、州内のヒンディー語地域、パンジャビー語地域のそれぞれを代表する組織を設け、それらに一定の立法権を付与するという案を示したが、この妥協案は失敗に終わった [Grewal 1998: 191-197; Brass 1974: 321]。
- 31) このときのパンジャビー語州設立は、この地方での政治的混乱に加えて、1965 年の第二次印パ戦争におけるシクの戦争協力を考慮したうえでの決定であったともいわれている [Grewal 1998: 203-204; Brass 1974: 322]。
- 32) 1970 年代以降のパンジャブ政治の動向や「カーリスターン」創設を求める分離主義的な動き、84 年に起きたアムリトサル黄金寺院への軍隊突入、インディラー・ガーンディー首相の暗殺と、それに対する「報復」の名のもとに行われたデリーその他でのシク虐殺については、[長谷 1988a; 1988b; 広瀬 1986; 佐藤 1984; Deol 2000]などを参照。
- 33) また、改革運動が批判したカースト差別の問題が、時代のなかで変化をとげながらも、シク社会において依然として存続しているのも事実である。独立後のインドでは、法制上で、「指定カースト」（いわゆる「不可触民」）に対して、高等教育、公務員職、議会における留保枠が設けられるが、1950 年以降はそのなかにシクも含まれるようになる [藤井 2007: 72-75]。近現代におけるシクの不可触民のアイデンティティや政治・社会運動については、[長谷 1994]を参照。
- 34) 「シク・ディアスポラ」という概念については、人々の様々なアイデンティティやつながりのなかから、宗教アイデンティティのみを重視している点で、誤解を招くものであるとの指摘もなされている [Ballantyne 2006: 23]。
- 35) 詳細については、[Ballantyne 2006; Singh and Tatla, 2006; Singh and Barrier 1999; 古賀・内藤・浜口 2000]などを参照。

参考文献

- 井坂理穂、2011、「インドにおける州再編問題 ボンベイ州の分割過程」、『アジア・アフリカ言語文化研究』、81 号、71-103 頁。
- コウル、W. O.、P. S. サンビー、1986、『シク教一教義と歴史』、溝上富夫（訳）、千曲書房。
- 佐藤清隆、2007、「在英シク・コミュニティの分裂とカースト制—多民族都市レスターの四つのグルドワーラーを中心に」、『駿台史学』、第 132 号、101-136 頁。
- 佐藤宏、1984、「インド宗教暴動の傷は癒えるか シク教徒反乱の背景を探る」、『世界週報』、7 月 17 日、20-24 頁。

シング、N-G. コウル、1994、『シク教』、高橋堯英（訳）、青土社。

古賀正則・内藤雅雄・浜口恒夫（編）、2000、『移民から市民へ—世界のインド系コミュニティ』、東京大学出版会。

長谷安朗、1988a、「シク教徒とパンジャブ問題—社会変動と宗教アイデンティティ」、『海外事情』、第36巻6号、35–59頁。

——、1988b、「パンジャブ問題とその経済的背景」、佐藤宏（編）『南アジア現代史と国民統合』、アジア経済研究所、209–262頁。

——、1990、「英領パンジャブ州における植民地政策と宗教アイデンティティ」、内藤雅雄（編）『近現代南アジアにおける社会集団と社会変動』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、149–199頁。

——、1994、「シク社会における不可触民—宗教とカーストの狭間で」、山崎元一・佐藤正哲（編）『叢書カースト制度と被差別民第1巻 歴史・思想・構造』、明石書店、307–350頁。

広瀬崇子、1986、「発展途上国におけるエスニック問題—パンジャブ紛争にみられるインド型政治発展に関する一考察」、『国際政治』、日本国際政治学界創立三〇周年期年号、128–144頁。

藤井毅、2003、『歴史のなかのカースト 近代インドの＜自画像＞』、岩波書店。

——、2007、『インド社会とカースト』、山川出版社。

マン、グリンドル・シン、2007、『シク教』、保坂俊司（訳）、春秋社。

三瀬利之、2010、「統治のための識字—植民地期インドの行政管理と統計—」、松塚俊三・八鍬友広（編）『識字と読書—リテラシーの比較社会史』、昭和堂、46–68頁。

Anand, R. L., 1969, *Census of India 1961, Vol. XIII, Punjab, Part I-A(i), General Report*, Delhi: Manager of Publications.

Bajpai, Rochana, 2011, *Debating Difference: Group Rights and Liberal Democracy in India*, Oxford: Oxford University Press.

Ballantyne, Tony, 2006, *Between Colonialism and Diaspora: Sikh Cultural Formations in an Imperial World*, Durham and London: Duke University Press.

Bowker, John (ed.), 1997, *The Oxford Dictionary of World Religions*, Oxford: Oxford University Press.

Brass, Paul, R., 1974, *Language, Religion and Politics in North India*, Cambridge: Cambridge University Press.

Butalia, Urvashi, 1998, *The Other Side of Silence: Voices from the Partition of India*, New Delhi: Penguin.
The Constitution of India (As Modified up to the 1st December, 2007), <http://lawmin.nic.in/coi/coiason29july08.pdf> (2012年3月18日閲覧)

Deol, Harnik, 2000, *Religion and Nationalism in India: The Case of the Punjab*, London: Routledge.

Deol, Jeevan, 2001, “Eighteenth Century Khalsa Identity: Discourse, Praxis and Narrative,” in

- Christopher Shackle, Gurharpal Singh, and Arvind-Pal Mandair (eds.), *Sikh Religion, Culture and Ethnicity*, Richmond, Surrey: Curzon.
- Fox, Richard G., 1985, *Lions of the Punjab: Culture in the Making*, Berkeley: University of California Press.
- Ghosh, Anindita, 2006, *Power in Print: Popular Publishing and the Politics of Language and Culture in a Colonial Society, 1778–1905*, New Delhi: Oxford University Press.
- Grewal, J. S., 1998, *The New Cambridge History of India, II.3, The Sikhs of the Punjab*, Revised Edition, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 2011, *Recent Debates in Sikh Studies: An Assessment*, New Delhi: Manohar.
- Hutton, J. H., 1933, *Census of India, 1931, Vol. I, India, Part II, Imperial Tables*, Delhi: Manager of Publications.
- Ibbetson, Denzil Charles Jelf, 1883, *Report on the Census of the Panjab Taken on the 17th of February 1881, Vol. I, Text and Appendices C and D*, Calcutta: The Superintendent of Government Printing.
- Jakobsh, Doris R., 2012, *Sikhism: Dimensions of Asian Spirituality*, Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Jhutti-Johal, Jagbir, 2011, *Sikhism Today*, London: Continuum Internal.
- Jones, Kenneth W., 1973, “*Ham Hindū Nahīn: Arya-Sikh Relations, 1877–1905*,” *Journal of Asian Studies*, XXXII-3, pp. 457–475.
- , 1981, “Religious Identity and the Indian Census,” in N. Gerald Barrier (ed.), *The Census in British India: New Perspectives*, New Delhi: Manohar.
- , 1989, *The New Cambridge History of India, III.1, Socio-religious Reform Movements in British India*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kaul, Pandit Harikishan, 1912, *Census of India, 1911, Vol. XIV, Punjab, Part I, Report*, Lahore: The “Civil and Military Gazette” Press.
- Khan, Khan Ahmad Hasan, 1933, *Census of India, 1931, Vol. XVII, Punjab, Part I, Report*, Lahore: The “Civil and Military Gazette” Press.
- King, Christopher R., 1994, *One Language, Two Scripts: The Hindi Movement in Nineteenth Century North India*, Bombay: Oxford University Press.
- Linden, Bon van der, 2008, *Moral Languages from Colonial Punjab: The Singh Sabha, Arya Samaj and Ahmadiyahs*, New Delhi: Manohar.
- MacLagan, E. D., 1892, *Census of India, 1891, Vol. XIX, The Punjab and its Feudatories, Part I, The Report on the Census*, Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing.
- McLeod, W. H., 1989a, *Who is a Sikh?: The Problem of Sikh Identity*, New York: Oxford University Press.
- , 1989b, *The Sikhs: History, Religion, and Society*, New York: Columbia University Press.
- , 2003, *Sikhs of the Khalsa: A History of the Khalsa Rahit*, New Delhi: Oxford University Press.

- , 2006, “The Tat Khalsa and Sikh Historiography,” *Seminar*, 567, pp. 76–78.
- , 2007, “Sikhs and Caste,” in Tony Ballantyne (ed.), *Textures of the Sikh Past: New Historical Perspectives*, New Delhi: Oxford University Press.
- Menon, V. P., 1957, *The Transfer of Power in India*, Bombay: Orient Longman.
- Middleton, L., and S. M. Jacob, 1923, *Census of India, 1921, Vol. XV, Punjab and Delhi, Part I, Report*, Lahore: The “Civil and Military Gazette” Press.
- Mir, Farina, 2010, *The Social Space of Language: Vernacular Culture in British Colonial Punjab*, Berkeley: University of California Press.
- Oberoi, Harjot, 1994, *The Construction of Religious Boundaries: Culture, Identity and Diversity in the Sikh Tradition*, New Delhi: Oxford University Press.
- Orsini, Francesca, 2009, *Print and Pleasure: Popular Literature and Entertaining Fictions in Colonial North India*, New Delhi: Permanent Black.
- (ed.), 2010, *Before the Divide: Hindi and Urdu Literary Culture*, New Delhi: Orient Blackswan.
- Report of the States Reorganisation Commission*, 1955, New Delhi: Govt. of India Press.
- Rose, H. A., 1902, *Census of India, 1901, Vol. XVII, The Punjab, its Feudatories, and the North-West Frontier Province, Part I, The Report on the Census*, Simla: The Government Central Printing Office.
- Sethi, Anil, 1998, “The Creation of Religious Identities in the Punjab, c. 1850–1920,” Ph.D. thesis, University of Cambridge.
- , 2004, “Identity, Strife, Community/Nation: A South Asian Perspective,” 文部科学省 21 世紀 COE プログラム 「史資料ハブ地域文化研究拠点」 (東京外国語大学) 特別企画・連続セミナー。 <http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/26315/1/cdats-hub3-18.pdf> (2012 年 8 月 8 日閲覧)
- Shiromani Gurdwara Parbandhak Committee, <http://sgpc.net/index.html> (2012 年 3 月 18 日閲覧)
- Singh, Gurharpal and Darshan Singh Tatla, 2006, *Sikhs in Britain: The Making of a Community*, London and New York: Zed Books.
- Singh, K. S., 1998, *People of India, National Series Volume VI, India's Communities, N–Z*, New Delhi: Oxford University Press.
- Singh, Khushwant, 1963, *A History of the Sikhs, Vol. I, 1469–1839*, Princeton: Princeton University Press.
- Singh, Mohinder, 2008, *The Akali Movement*, New Delhi: National Book Trust.
- Singh, Pashaura and N. Gerald Barrier (eds.), 1999, *Sikh Identity: Continuity and Change*, New Delhi: Manohar.
- Tandon, Prakash, 1961, *Punjabi Century 1857–1947*, London: Chatto & Windus.
- Tejani, Shabnum, 2007, *Indian Secularism: A Social and Intellectual History, 1890–1950*, New Delhi:

Permanent Black.

Talbot, Ian and Gurharpal Singh, 2009, *The Partition of India*, Cambridge: Cambridge University Press.

Uprety, Prem Raman, 1980, *Religion and Politics in Punjab in the 1920's*, New Delhi: Sterling.

Vashishta, Lakshmi Chandra, 1953, *Census of India, 1951, Vol. VIII, Punjab, Pepsu, Himachal Pradesh, Bilaspur & Delhi, Part I-A, Report*, Simla: The Army Press.